

多比羅真理子 (編著)

『ギヤスケル中・短編小事典』

東京：開文社出版、2016年1,800円、170頁

宇田朋子

『ギヤスケル中・短編小事典』の編著者である多比羅真理子氏は、日本ギヤスケル協会第3代会長を務められた方であり、長きにわたってエリザベス・ギヤスケルの研究を続けられてきた。

日本におけるギヤスケル研究の開祖的存在であり、日本ギヤスケル協会の初代会長として活躍された山脇百合子氏に学生時代から師事し、その薫陶を受けられたと聞く。ギヤスケルが、エリザベス・ギヤスケルという一女性作家としてではなく、ギヤスケル夫人という主婦作家として、ディケンズ研究の中で「ディケンズに認められた作家の一人」として名前が挙がる程度、もしくは、ブロンテ研究の中で、シャーロット・ブロンテと交流があり、後に伝記を書いた人、として名前が挙がる程度であった頃、かろうじて『クランフォード』が文学史の中で言及される程度であった頃から、山脇氏はエリザベス・ギヤスケルの作品に文学的価値を見だし、ご自身の研究テーマとしてギヤスケル文学を扱われてきた。

多比羅氏は、おそらく山脇氏から多大なる影響を受けられ、ご自身もまた、エリザベス・ギヤスケルの文学を研究テーマとして定められたのであろう。そして、多比羅氏は、ギヤスケルの中・短編小説に多くの興味を抱かれたものと思われる。中でも、短編「リジー・リー」について、多くの発表をされている。

多比羅氏が日本ギヤスケル協会の会長を務められていたとき、まだ十分にギヤスケルの短編に光が当てられていなかった状況を苦慮し、また日本ギヤスケル協会会員同士の交流の場の一つとして、「ギヤスケルの短編を読む会」を発足された。これは日本ギヤスケル協会の正式な活動として、現在では研究会という形で継続されている。この小事典は、その研究会に参加されている会員の方々執筆者となり、多比羅氏が中心となりまとめ上げられたものである。このあたりの詳細については、本書「あとがき」の項に詳しく述べられている。

本書は、まず2編の巻頭論文から始まる。1本目は、現日本ギヤスケル協会会長である、鈴木美津子氏の「ギヤスケルの短編小説の魅力」である。鈴木氏は、ギャ

スケルの作品は短編小説の比率が圧倒的に大きいことから、ギヤスケルが「短編小説を執筆する際には、長編小説の場合よりも、さらに自由奔放に、大胆に想像力を膨らませて、華麗な小説空間を構築する小説家」(p.1)の一人であると述べる。そして、アンガス・イースン『エリザベス・ギヤスケル』の中で、ギヤスケルの短編小説が大まかに3つに分類されていることを紹介している。これは、作品が発表された雑誌による分類である。

鈴木氏は、その一方で、シャーリー・フォスターがテーマ別、ジャンル別の分類に挑戦していることを紹介する。もちろん、すべての短編を明確に分類することはかなり困難なことであるが、このような内容やテーマによる分類を提示することにより、鈴木氏は「ギヤスケル短編の魅力、個性がより際立つように思われる」(p.4)と述べている。鈴木氏の巻頭論文は、今までギヤスケルの短編にあまり触れたことがない人たちに、その魅力を紹介し、是非読んでみたい、と思わせるものである。

一方、巻頭論文2本目は、日本ギヤスケル協会の事務局長を長らく務められていた、市川千恵子氏の「エリザベス・ギヤスケル——ジャンルを横断する女性作家——」である。市川氏はこの論文の中で、ギヤスケルの作品は、フェミニズム批評の観点からどのように読むことができるのか、そしてギヤスケルが「書く」という行為をどのように獲得し、「書く」という行為によって何を示そうとしたのか、を論じている。

ここでは、20世紀になって、ギヤスケルの作品が再評価をされることになったきっかけが、実はマルクス主義文学批評からであり、「1950年代後半から60年代初頭にかけては、まずギヤスケルの産業小説に光が当てられることになる」(p.7)ことを紹介する。

その上で、1970年代以降のフェミニズム批評では、ギヤスケルの創作を、ギヤスケルの「母性」(=母親であること)と関連づけていること、ギヤスケルの創作のきっかけが我が子を喪ったことである、という点や、母親としての経験が、よりよい作品を生み出すであろう、とギヤスケルが考えていたことを紹介する。

また、市川氏は、ギヤスケルの作品は、そのジャンルや形式が多岐にわたることに注目する。そして、ギヤスケルが提示し続けた社会的問題は、現在も「本質的な部分では解決されていない、ゆえに現在的なものなのである。」(p.9)と結論づけている。

この2編の巻頭論文は、すでにギヤスケルの作品になじみのある読者にとっては、ギヤスケル作品の新たな解釈のヒントとなり得るだろうし、ギヤスケル作品になじ

みのない読者にとっては、ギヤスケルの短編を読み、解釈する上での大きな道標となるものである。

本書は小事典、という名がつけられている通り、ギヤスケルの中・短編小説について調べたいときには大変役に立つ内容となっている。作品のひとつひとつに、作品の背景、翻訳・作品名、その作品が掲載された雑誌名、作品の主な登場人物、あらすじ、作品のテーマ、重要な本文の一部の抜き書き、及びその訳、引用文献、といった内容が呈示されている。一つの作品に4ページが割かれており、全部で32の作品が取り上げられている。

すべての作品が取り上げられているわけではない、というところは、ギヤスケルの中・短編小説研究の集大成と考えるには少々物足りないかもしれない。しかし、本書がもともとは、日本ギヤスケル協会の研究会のレポートを発展させたものである、という出自や、ギヤスケル没後150年記念出版を念頭に置いていた、という時間的背景を考えれば、十分といえよう。ただ、多比羅氏があとがきに書いておられるように、本書には、有名な『従妹フィリス』が扱われていない。理由は納得がいくものであるが、それでもやはり、残念な気持ちを抑えることはできない。

ギヤスケルの作品にあまり触れたことがない読者は、本書を事典として利用し、作品の背景や、あらすじに関心を持つであろう。あらすじを読み、作品の方向性やテーマがわかり、その作品に対する好奇心がわいてきたら、是非、『ギヤスケル全集 別巻ⅠⅡ』（日本ギヤスケル協会監修、大阪教育図書出版）を手にとって、実際の作品を読んで貰いたい。本書のあらすじはわかりやすくまとめられているので、確かにこれだけで作品を読んだような満足感を得られるかもしれない。だが、オリジナル（原典）を当たる、ということが文学研究の第一歩であり、また一番の基本でもある。本書がギヤスケルの作品への招待状となってくれば、これほど喜ばしいことはない。

本編以外にも、本書には多くの資料が添付されている。巻末には、ギヤスケルの年譜、作品一覧、研究書一覧のリストがついている。本書の索引は、人物・地名、ギヤスケルの作品名、登場人物名、事項と、さらに細かい分け方から検索できるようになっている。これは、ギヤスケル研究の初心者のみならず、ギヤスケル作品研究をすでにしてこられた読者にとっても大変役に立つものである。

さらに、口絵に使われている、ギヤスケルハウスの写真や、イラストも、枚数は少ないものの、どれも見ていて飽きないものである。

すでにギヤスケルの作品になじみのある読者には、本書は事典としてだけでなく、

研究書の一つとして、また読み物としても興味をそそられるものだと思う。もちろん、事典という性質上、各作品に割り当てられる分量には制限があり、作品の解釈もどうしても短くならざるを得ないのは仕方ないことである。

例えば、心温まるクリスマスストーリー「クリスマス——嵐のち晴れ」では、作品のテーマとして母性を大きく取り上げている。お互いに不和であったメアリとミセス・ホジソンが、メアリの息子の偽膜性喉頭炎をきっかけに、その関係が急速に改善され、最後は一緒に食事をし、その後夜遅くまで趣味の歌を歌いながら、ティーを楽しむことになる、という、まさに赦しの季節にふさわしい物語である。

若く、育児経験の不足から、息子の急病に何をすることもできずうろたえるメアリと、自分は子どもには恵まれなかったものの、人生の経験値が高く、赤ん坊の病気に適切に対処し、その命を救うことができたミセス・ジェンキンス。本書では、その二人について、「その時発揮される母ではない女性の子どもの命を救う能力と、育児に自信の無い若い母親の恐れを通して「母性」の意味を問いかける物語である。」(p.23)と結論づける。

だが、この短編には、この二人以外にも母親が描かれている。メアリの母は、実際には登場しないものの、遠く離れて暮らす娘のために、太陽の光に当てて晒したタオルと手作りのソーセージを、クリスマスプレゼントとして送ってくれたのだ。それを受け取ったメアリは、同封されていた手紙を読み、母と、実家の思い出にしばし浸る。一日うまくいかず、イライラしていたメアリの顔にほほえみが浮かんでいる。

遠く離れた娘のことを思い、娘が好きだった味付けのソーセージを作って送る、という行為は、現代の母親にも通じるものである。これは、強烈な母性の表れであり、若い母親は、その前では娘に返る。

そして、その母親の作ったソーセージが、若いメアリに、いつも叱られてばかりで怖い存在のミセス・ジェンキンスの家を改めて訪問するきっかけとなる。そもそも、息子を助けてもらったときには、メアリはうろたえて泣くばかりで、きちんとお礼も言えなかったのだ。だが、メアリの母が作ったソーセージをきっかけに、彼女はミセス・ジェンキンスに話しかけ、お礼を伝えることができたのだが、残念ながら本書にはこのエピソードに割く割合がない。

また、作品のテーマの一つとして、男性の女性に対する圧力がある。そもそも、お互いの夫婦の仲が悪いのは、それぞれの夫が支持する政治体制の対立からである。メアリの夫ホジソン氏は、民主主義派の地方新聞イグザミナーの植字工の主任であ

り、密かに新聞の空いているスペースに、収穫のお知らせや動物に関するちょっとした記事や、詩などの文学小編を掲載していた。どちらかという文学的才能のある人物で、妻のメアリはそのことを誇りに思っている。

一方ジェンキンス氏は、政治的に対立するトーリー党の新聞フライング・ポストで働いている。そもそも、夫同士の政治的理念の対立から、この両家は妻同士を巻き込んだ対立関係にあるのである。物語の序盤の、クリスマスディナーに関するエピソードを読めば、それぞれの夫が相手への喧嘩をふっかけていることがわかる。相手の家の前でこれみよがしに「ソーセージを買うのを忘れないように」と、妻に大声で叫んでみたり（これは、相手の家計が少々苦しいことを知っていて、わざわざ自分たちは自由に買い物ができるのだ、と言っているのだ）、他方、経済力では負けている側は、自分たちには子どもがいる、ということ強調してみる。相手の奥さんは、子どもが欲しくて仕方なかったのに、結局子宝には恵まれなかった、ということを知っているの発言である。

このような夫たちの言葉に、女性たちは疲弊してしまう。そして、飼い猫に大切なソーセージを食べられてしまったというジェンキンス家に、メアリは母親手作りのソーセージを分けてあげる決心をし、夫にそのことを話すのだが、夫から相手の政治観は尊敬できない、といわれたメアリは、涙を目に浮かべてこのように反論する。「ねえ、ジェム、ゆうべの坊やに対する、彼女の働きぶりをあなたが見ていたら！彼女はこれからもずーっと私を叱るかもしれないけれど、もう口答えしないの。私は彼女のネコにさえ、喜んでソーセージを与えます。」（ギヤスケル p.100）

この初めての反乱がきっかけとなり、二人の女性は急速に仲直りをするようになるのだが、このようなフェミニズム的解釈や、その他にも注目すべき点があることは、ギヤスケルの小説を読み慣れた読者なら、すでに承知のことであろう。従って、それぞれの項を執筆された先生が、どの点に注目してそれぞれの作品を解釈しているのか、注目しながら本書を読むのも一興である。

今まで述べてきた通り、本書は、ギヤスケル文学にあまりなじみのない読者や、これからギヤスケルを研究し始めようという若い研究者にとっては、大変心強いギヤスケル中・短編小説への入門書となるであろうし、また研究の力強い指標となるものである。一方、ギヤスケル文学への造形が深い読者にとっても、大変興味深い研究書であり、今後の研究活動の助けとなるものである。様々な人たちに手にとってもらい、ギヤスケル文学の魅力を伝えてもらいたいと思う。

改めて、本書を執筆された先生方、巻頭論文をご寄稿された先生方、そしてそれ

らをまとめられた多比羅眞理子氏に、敬意を捧げたいと思う。そして、この研究会が今後とも末永く続いていくことを願ってやまない。そうすれば、ほど遠くない将来に、本書の続編となるギヤスケルの中・短編小説研究の新作に出会うことができるであろう。その日が来るのが待ち遠しく思われる。

\*引用は本書、及び日本ギヤスケル協会監修『ギヤスケル全集 別巻Ⅰ』（大阪教育図書）からである。

(聖徳大学短期大学部准教授)